

※ 以下は、3月20日のルネ研関西研究会で報告したレジュメである。1. および2. の最後に出てくる数字は『資本の専制、奴隷の叛逆』の引用頁を示している。途中のインデントで字下げしてある部分は、報告者のコメント/メモであるが、それ以外は参考文献からのコピーでないし要約である。

ルネ研関西研究会報告レジュメ

2017年3月20日

後藤 元

2011年以降の占拠闘争の示すもの—民主主義の側面から

1. 15M: スペイン占拠闘争とポデモス: 以下『資本の専制、奴隷の叛逆』より

1) 背景

2010年ヨーロッパ経済危機、サパテロ社会労働党政権による緊縮策の受け入れ、若い世代の不安定化・失業→15Mの基盤形成

2) 15M: 尊厳の要求を伴う怒りの表出、「怒りとは自分に似ている他者に対してなされる悪について人が抱く感情」「未来なき若者たち」159

3) 「15Mが行ったのは一種の「表皮」を展開することだった。」リビドー表皮: 「様々な強度が偶然に支配された非決定的な仕方でその上を流れているような表面」、劇場的厚み: 「もはや二次元的な表面ではなく、一つの三次元的空間で、役者/観客、内/外といった内的分離によって特徴付けられたもの」226

「スペイン各都市での広場占拠は五週間続いたが、その効果としてスペイン社会全体が一つの非常に敏感な表面へと作り変えられた。」「この意味で、僕たちにとって重要だったのは15Mを「運動」「組織」としてではなく「気候、風土、雰囲気」として語るということだった。15Mは新たな「雰囲気」の出現、どんな特権的な地点にも収斂されない非常に流動的で開放的な情動的表皮の出現、プエルタ・デル・ソルでの総会（ジェネラル・アセンブリ）にすら還元されない表面の出現であると僕たちには思えたのである。五週間続いた広場占拠の後、多種多様な政治化が開始されることになる。たとえば医療従事者や病院利用者たちは「白の潮流」を結成して公共医療の私企業化に抗する闘いを開始し、教員や親そして学生たちは「緑の潮流」を結成して教育予算削減に抗する闘いを開始する。銀行に住居の明け渡しを迫られた住民たちと新旧の活動家グループとの共闘である「住宅ローン被害者プラットフォーム」(PAH)もある。全てはあたかも伝導体の表面に電流が走るかのように展開したのである。スペイン社会全体が一枚の表皮のようなものとなり、その表面上のある点で起きていることと他の点で起きていることが互いに接続しあうといったことが自由に繰り返された。」227-229

「感覚が研ぎ澄まされるという現象が問題となっていた」「まさに敏感な肌が形成されるといった現象だった。」「感覚が研ぎ澄まされるというのは、すでに起きていた何事かが突如として新たな仕方で感覚されるということである。たとえば立ち退き（住宅ローンが支払えず住民が住居から強制的に追い出されること）は15M以前からすでに一日あたり四百家族といった大きな規模で行われていた。しかし当時は、実際のところ、ほとんどの人にとって目に見えるもの、感じられるもの、それに対してアクションを起こすべきものとはなっていなかった。PAHの創設は2009年のことだが、彼らの活動は当初ほとんど知られていなかった。しかし15Mによって「表皮」が拡大されることで、立ち退きは突如として「耐え難いもの」として知覚されることになる。それまでは「耐え難いもの」として感覚されていなかったものが突如として「耐え難いもの」として感覚されること

になったのである。」 228

4) プエルタ・デル・ソルからポデモスまで：2011年から13年にかけて

- ① 「ソル占拠は2011年5月15日から同年6月23日まで続いた。この5週間はエネルギーの集中した暴風雨のような期間だった。占拠の終わりにたいへん困難であると同時にたいへん興味深い議論がなされた。「何をなすべきか」ということについての議論である。占拠を続けるべきだという者もいたけれど、もっと参加しやすい政治を行うべきだという者もいた。広場占拠という運動形態は家族のない人、働いていない人、学生には好都合だが、そうでない人には参加することがなかなか難しい。結果として、運動をそれぞれの地区へと移すことが決定された。つまり、各都市のそれぞれの地区に評議会を創設し15Mの脱中心化が図られた。そのようにして創設された地区評議会の多くは「15M 評議会」と名づけられた。評議会には近隣住民による地区単位のもののほかにテーマ別のものもあった。」 243
- ② 「広場占拠から地区評議会へというこの動きはスペイン全土で同じように進んだ」「これは改めて考えてみると驚くべきことだと思う。マドリードでソル占拠が始まったその一週間後、ぼくはラジオ番組に呼ばれたのだが、この番組には中継も含めてスペイン中の30箇所の広場占拠からの人々が出演した。出演者はそれぞれ自分たちの広場占拠について語ったわけだが、とりわけ興味深かったのはどの人の話もほとんど同じだったという点である。感じている情動も同じなら、問われている問題も同じ、語られている言葉も同じだった。この同時性が2011年5月から3年間続いたといっても良いだろう。」「運動のこの伝染、同時的拡散は驚くべき現象」 243-244
- ③ 「委員会」：分野ごとにグループに分かれて様々なプログラムを具体的に考える試み。「経済委員会」は「政党に属さない人々も多く参加し、「銀行救済プラン」に対抗するプログラムとして「市民救済プラン」の作成などに取り組んでいた。15Mにおける「委員会」の活動はその後の「潮流」と呼ばれる別の過程を準備もした。医療従事者や教育従事者たちの発意による15Mの継続とみなしうる「潮流」は、医療や教育の私企業化に対抗する運動として労働組合を核に組織されたものである。」「公教育のための「緑の潮流」は、労組に属する教員だけでなく、学校教育をめぐる全ての人々、生徒や学生、親なども巻き込む運動であり、「大衆の政治化」という文脈ではとても重要な試みであった。」「労組主導の下で私企業化に抗する教員の運動として誕生したものが、すでに同様の問題に取り組んでいた15Mに合流し、一体化し、労組という枠組み自体から大きくはみ出すものになっていった」 164
- ④ 「スペイン全土でほぼ同時に運動は地区単位のものへと移行した。」地区評議会の活動開始。「それと並行して夏の間大きなデモがいくつか行われた。」ローマ法王のマドリード訪問、プエルタ・デル・ソルの封鎖。「地区評議会では作り出せないような大きな効果、広場占拠で経験したような規模の効果を人々は常に求めていたのだと思う。」10月15日に予定されていた世界同時アクションのための準備。「緑の潮流」の出現。潮流：公的セクターの労働組合のイニシアティブによるもの。緑の潮流：公共教育、白の潮流：医療、オレンジの潮流：官公庁における運動、公共サービスをまもる。 244
- ⑤ 「「緑の潮流」(緊縮策によって教育予算の削減が進められ公共教育が不安定化し続けている状況に応じたもの)もまた(15Mと同様)一つの「招待の空間」として出現し、イデオロギーを超えて全ての教員が参加できるものであると同時に、学生や親を招き入れるものでもあった」「「緑の潮流を起点としてデモのみならず、学校占拠や街頭学級といった様々な興味深

い試みもなされた。」 245

- ⑥ 2011年11月総選挙、国民党 PP が絶対多数を獲得、社会労働党 PSOE は第二党に。15M についてのドキュメンタリ、本の刊行、労働者協同組合の形成など「広場占拠を経験して家や地区に戻った人々が広場占拠で高められた力をそれぞれの仕方で具体的な試みを通じて発揮した」 245
- ⑦ 「オレンジの潮流」：総選挙後、「官公庁での人件費削減に抵抗する運動で、彼らは大規模なデモを幾度か行い、またゼネストも行った。「オレンジの潮流」には警官も参加していた。」「警官たちは、本心ではシンパシーを抱いているにもかかわらずそれでもなお人々によるデモに敵対する責務を果たさなければならず、また賃金を減らされ彼ら自身の生活が不安定化してもいた。マドリードでのデモでは 15M の人々が警官たちと一緒に隊列を組むというたいへん奇妙な現象が見られることにもなったが、しかしこれはまさに運動の感染力、拡散性がどれほどの高みに達しているかの示すものだったといえる。警察ではパトカーのサボタージュ、デモや居住接收の際の出動拒否といった不服従も行われた。」 246
- ⑧ 2012年9月25日国会包囲アクションー議員総辞職要求。「白の潮流」国会包囲と同時期に出現。「医療予算削減とともに 15 の公営病院の私企業化が決定されたのだが、これに対して医療従事者たちが反対運動を起こした。白の潮流も 15M をモデルとし「極めて包摂的な空間を創出した。医者や看護師、病院職員たちにとどまらず病院利用者たちもまた運動に参加したのである。通常、医者たちがストライキをすると患者たちは事実上その「被害者」となってしまふ。しかし「白の潮流」では医療従事者も病院利用者も一緒に参加できるような空間が産み出された。15M が解体したものの一つにコーポラティズムに基づく闘争がある。闘争は特定の人々のためのものではなく全ての人にとってのものになった。医療も教育もあくまでも全ての人に関わる普遍的な問題として扱われるようになった。社会を断片化していた様々な内的境界が取り払われ、互いに異なる人々が一つの共通の問題を軸にして混ざり合うということが起きたのだ。」 247
- ⑨ ランシエールの有用性。「差異の配分に存する「ポリス的秩序」が、ありとあらゆる類の分割線を越えて展開する運動によって解体されたままにとどまる。」「スペインでの運動は左翼/右翼、専門家/素人、労働者/消費者といった差異化に基づくポリス的秩序を乗り越えることに成功した。いたるところで運動は政治的アクションの独占（誰に発言権があるのか、誰に決定権があるのか）を問いに付したのだ。」 248
- ⑩ 2013年、PAH の存在感が大きかった年。「15M の時にはまだ小規模で、マドリードでは立ち退きをひとつも阻止できていなかった。しかし 15M の「表皮」が広がるにつれて多くの人が PAH の活動を支持するようになり、スペイン全土のすべての市町村にひとつずつ支部が創設されるまでに PAH 自体の規模も拡大することになった。PAH は今日もなお精力的にその活動を続けている。「表皮」が「劇場」に転換した今日にあって、その「劇場」の陰で存続する「表皮」の主たる部分をなすのが PAH だといっても良いだろう。PAH は直接行動を精力的に展開するのと同時に被害者同士の助け合いを組織し、また銀行や政治家との交渉も進めるといったように闘争をマルチレベルで展開した。2013年にはスペイン中で誰もが立ち退きを話題にするようになり、PAH はいくつかの立ち退きの阻止に成功するようになる。」 248
- 生活、経済・社会問題の政治化。住居、医療、教育、公共サービス。しかも個別具体即普遍的課題となるような「雰囲気」「表皮」横断性の形成が決定的。その背後にある、

構造的不況、長期にわたる高い若年失業率、それに加えて 2008 年リーマンショック以降の不況、金融引き締め、ユーロ・EU の特殊性。

日本の安保法制反対運動との違い。まだ政治と生活・経済が結びついていない。反原発闘争は、沖縄反米軍基地闘争は、その萌芽を示す。

- ① 新たな闘争：道路清掃人たちの運動、2014 年 1 月ブルゴス市の都市整備計画に反対する運動。
「重要なのは、かつてであればそうした闘争は当事者だけのものにとどまることが大半だったが、15M 以後は共感の「雰囲気」あるいは「表皮」にそうした闘争が直ちに書き込まれその力能が可視化されるがゆえに多くの人々から広い支持を得るようになったという点である。」 249

- 5) 「15M から三年間続いたこうした運動の展開はすべて 15M によって創出されたコードの実現であった」「あらゆる分割線を越えて差異やアイデンティティを二次的なものとし、具体的な問題の共有を第一のものとする包摂のコード。街頭に出るというアクションもあくまでも共有の精神において生きられる。」「他方、「非暴力」もまた 15M を特徴づける重要な要素である。15M は非暴力をその絶対的前提とする運動であったが、これはスペインでは初めてのものだ。ブラックブロックやアナキストといった暴力的な傾向のあるグループですらも 15M では非暴力不服従というコードに従った。」「様々な「潮流」や PAH、道路清掃人運動や各地区での闘争、労働者協同組合といったように多岐にわたる運動が展開されたが、そうした運動はその多様性にもかかわらずいずれも同じ特徴を共有し、また 15M を共通の起源としていた。自分たちは一つの同じ世界を共有しているという考えにすべての運動が立脚していたと言ってもいいかもしれない。たとえば 2000 年代初頭までの闘争サイクルを象徴する社会センターやスクワットといった試みにおいてはまだ、世界に抗して一つの強いアイデンティティを確立するという側面がはっきりと残っていた。しかし今日では「我々是一个の同じ世界の中で共存しており、その世界には我々みなで取り組むべき問題がある。政治が始まるのは我々の共存するこの世界についてみんなで共有できる問いを立てることによってであり、世界に対する感受性をそのように共有する限りにおいて我々は、たとえイデオロギー上の相違があろうとも、各自の思う仕方アクションを試みることができる」といった発想になった。特定のアイデンティティに基づいた閉じた運動から、すべてを包摂する開かれた運動へ。要するに、新たな普遍性が発見されたということであり、「それはあなた方の運動で我々には関係がない」という発想が過去のもものとされたのである。」 249-251

- 6) 15M の限界：ポデモス登場の背景

- ① 「ソル占拠からの三年間、僕たちは外部/内部の区別がないこの平滑な空間（リビドー表皮）の中で生きていたわけだが、その後起きたのは、この平滑空間が一つの劇場に転じられ、そこにパブロ・イグレスiasやイニゴ・エレホンといった幾人かの特定の政治的アクターが出現し、社会が彼らを外部から眺めるようになるという事態だったといえる。社会全体における水平な闘争から代表性の舞台での「喧嘩」へと事態が移行したということだ。特定の政治的アクターの出現によって、散種された他の諸点よりも強力な一つの特権的な中心点が定められることになった。」 229
- ② 「「表皮」というものを「運動状態にある社会」として理解する必要がある。「運動状態にある社会」は、たとえば反戦運動、フェミニスト運動、エコロジー運動といった所謂「社会運動」と同じものではない。「運動状態にある社会」とは社会全体が運動状態におかれているということである。重要なのはこの「運動状態にある社会」がマクロレベルでは今日に至るま

でほとんど何も産み出していないという点である。緊縮策は継続されたままなのだ。」「PAHが2009年のグループ創設以来これまでに阻止し得た立ち退きは合計1000件程度で、これは立ち退きが一日あたり400件あることに鑑みればその三日分にもみたくない数だということになる。緊縮策によって産出されるものの規模と運動によって産出されるものの規模との間には、運動がいくらPAHのように強力なものであっても、とてつもない不均衡、耐え難いギャップがあるわけだ。」230

- ③ 「スケールにおける不均衡も指摘できる。ギリシャの例などを通じて近年、突如として誰の目にも見えるものとなったのは、資本主義がその決定の中心をトロイカといったトランスナショナルな次元に有しているのに対して、僕たちのほうは極めてナショナルな次元にとどまり続けているという状況である。」231
- ④ 「15Mの運動は人々に日々の暮らしそのものの変革を強く求めるものだったが、問題は、みんなが各自の生活を変え続けていけるのかどうか、そのための意志あるいは勇気を持ち続けられるのかどうか、つねにいつそう強力な形で問いかけ変化を生み出し続けられるのかどうか、まるで定かではないという点にある。人々はむしろ、全てが変化してほしいが自分自身はできるだけ変わらたくないと思っているのではないか、そうしたことから運動の停滞が生じ、それがまた「劇場」の出現を許すのではないか。自分自身ではなく他の誰かに問題解決を引き受けてもらいたい…。主観性あるいは実存の変容に存する運動において求められる生活全体の変化は、多くの人にとって、いつまでも続けられるようなものではないだろう。」231
「2013年に入った頃から実際、「疲労」ということが頻繁に話題にされるようになった。運動が「袋小路」に陥ってしまっていることを説明するために「我々は疲れた」ということが言われるようになった。」232「これは持続可能な政治ではない」と。
- ⑤ ポデモスの議論：「社会は疲労しており、人々は自分の家に帰りたがっている。政治的責務から解放されて仕事に戻りたがっている。家族のもとに戻りたがっている。だからこそ我々は代表性のシステムの再建を考えなければならない。」「民主的エリート主義」批判、「水平型政治」や「下からの運動」といった発想にエリート主義をみてとる。「これらの発想は人々がみな活動家になることを欲しているということを前提としているが、実際にはそうではないのではないか、人々は家族との時間も大切にしたいがっているのではないかというわけだ。」232
ポデモスの一部の人々：「たくさんの人々の政治参加があったのはたいへん素晴らしいことだが、これには限界あるいは停滞が必ず伴う。社会は疲労するからだ。したがって我々は社会に休息を与えるために政治的的代表性を再導入しなければならない」「要するに、人々が疲労しないためには「劇場」を再導入しイニゴ・エレホンやパブロ・イグレシアスが政治的責務を引き受けなければならないというわけだ。」232
速度やスケールにおける不均衡、変革の要請とそれによる疲労という問題。233
- ⑥ 「いかにすれば持続可能な政治は可能なのか、いかにすればそれとともに暮らしていけるような政治は可能なのかということが、僕たちにはまだまるきりわかっていないのだ。」233
- ⑦ 「組織化の観点からも同じことが指摘できるだろう。15Mにおける組織化は基本的に「評議会」（総会）という形態をとったが、これは時間の経過とともにどんどんとその参加者数を減らしていった。日々の暮らしと評議会とのあいだに大きな隔たりがあったからに他ならない。政治をするには日々の暮らしを断念し活動家になるしかなかった。評議会のフォーマットは日常生活のそれと大きく異なる。評議会のフォーマットにおいては政治と生活とが分離され、

生活を犠牲にし政治のプロになることが求められる。そのようなことを誰もが望んでいるわけではないことは明らかだ。だからこそポデモスは「劇場」への回帰を語るのであり、彼らが提起している問いはけっして現実離れしたものではないのである。しかし、やはり僕には、代表性構造へと回帰し、役者/観客の劇場的関係を再構築するという彼らの提案は受け入れられない。政治と生活を何か別の形で結びつけるその方法を考えなければならないのだ。」233

- ⑧ 「選挙に勝つことを明確に目的として位置づけたうえで、そのためにはリーダーを一人立て、単純化した言葉で現実を語り、メディア戦略を展開しなければならないとするポデモスが、当時の「雰囲気」のなかで現実的なオプションとして人々によって選択されることなどありえないだろうと思っていた」「いまから振り返れば、社会全体の政治化という当時の僕の考えは少しばかり無邪気に過ぎたのだと思う。ポデモスは実際には機能することになり、人々はみな「劇場」にすっぽりおさまり、舞台上でパブロ・イグレシアスらが演じるスペクタクルについて、批判するにせよ賛同するにせよ、客席にとどまってそこから議論するだけとなってしまった。」234

- ⑨ 他の分析：垂直性の欠如

2012年9月25日の国会包囲行動—議員総辞職要求のあと、一方で警察による暴力的弾圧と公共の場での集会に対する高額の罰金徴収、他方で「各地区での評議会においても先に進むための突破口が見出され得なくなった」ことにより15Mは衰退。162-163「評議会では総じてとても「礼儀正しい」内部規則の厳守が求められ、たとえば同意を表明する場合には拍手ではなく静かに挙手するとか、誰かの発言が長すぎる場合にも特定のジェスチャーで合図しなければならないなど、全てが厳格に定められていた。しかし、過度に礼儀正しいそうした内部規則はいわばそれ自体がコンセンサスの押し付けそのもので、評議会の内的限界をなしていた。真の決定を下すことができなかつたのである。」163

- ⑩ 15Mと政治的代表の問題：政治組織結成の要求 164

15Mの主張「我々は代表されない」。二つの解釈、一つは「誰かが誰かを代表することそれ自体が不可能である」「我々は一切の代表関係を越えたところに存在する」。もう一つは、「いま代表の座に就いている者たちはわれわれの良き代表者ではない」「われわれは別の代表者を必要としている」。

「代表関係の拒否が代表関係それ自体の中にすでに含まれている」「代表とはつねに弁証法的であり、つねに不在の現前だからだ。」「我々の代表者は我々を別の仕方でも再現させるのであって我々をあるがままに再現させるわけではない。いずれにせよ、15Mがその停滞をどう突破しようとしたのかは、不在と現前をめぐる代表性の弁証法という観点からよりよく検討することができるように思う。15Mでは代表関係が拒否されると同時に代表制度の空間における行動が緊急に求められてもいた。代表制度それ自体の拒否、ネットワークという方向での試みの一つとして「政党X」が挙げられる。この試みはとりわけバルセロナで力強く展開され、自治体選挙の際、アダ・クラウを筆頭とした民衆連合市民候補リスト「バルサロナ・アン・クムー」の形成において重要な役割を果たした。」166 政党X：15M運動から生まれた市民運動ネットワーク。既存の政党の形をとらず、水平的なつながりを強調する。167 注「「政党X」と同様の方向性を持つものとしては、左右の区別を超えた横断的な政治・社会変革をめざす「民主主義プロジェクト」という試みもあった。」166 「いずれにおいても物事は思うようには進まなかつた。」166

7) ポデモス：2014年1月結党

- ① 「事態が展開し始めたのはマスメディアを起点にしてのことだったといえる」パブロ・イグレシアスら大学教員たちによるマドリードの地域テレビチャンネルでの政治討論番組の開始。街頭において再開されていた政治的議論をイグレシアスたちはマスメディアに持ち込んだ。これが世論形成に与えた影響は甚大であった。イグレシアスは左翼の物言いとして受け止められることを積極的に拒否する話し方をする。15Mは、左翼の枠組みに納まることを拒否する運動であった。「一般の人々」と同じ言葉遣い。つまり、どんな既存のイデオロギー的オプションも自分にはぴったりこないと感じつつも、社会や暮らしについて何らかの欲望を抱いている多くの人々と同じ言葉遣いである。」167、169 フランスの革命的共産主義者同盟 LCR の「ブザンスノは党が階級を代表するという非常に古典的な考えから脱しえていない。アルチュセールの表現を借りて言えば、党は小さな「国家」のようなものとしてあり、住民のうちの特定の部分を代表するという考えだ。語りかける相手をあらかじめ限定し、誰を相手にするのかという境界をあらかじめ自ら設定してしまう。一例を挙げれば、1970年代のフランス共産党は「我々は貧者である」というスローガンを掲げたが、これは実際大失敗だった。富者に金を払わせるという含意のこのスローガンがヨーロッパでも比較的豊かなフランスで掲げられれば、フランス国内の大半の人は自分が払わせられるんだと思うにきまっている。自分で自分の限界を定めてしまうがゆえに多数派に到達し得ない典型的な例である。アントニオ・グラムシはこの点について非常にはっきりと語っている。「普遍的な利害を擁護することによってのみ個別的な利害を代表することができる」と。これこそ政治の本質である。これとは正反対に左翼は長い間、個別的な利害をあくまでも個別的な利害として擁護してきたのであり、その左翼の眼前に屹立する階級支配構造においては右派こそが彼らの個別的利害をあたかも普遍的な利害であるかのように語り、見事な成功を収めてきた。左翼はサバルタン役を選ぶことで、権力奪取のあらゆる可能性を自ら失ってきた。だからこそ語り方をなんとかしてでも変える必要があった。戦術を変える必要があったのだ。」170「ポデモスの選択した言葉遣いは横断的かつ普遍的であると同時にラディカルでもある。ラディカルさが大衆のそれでなければならぬと考えているからだ。逆に言えば「プロレタリア」を自分たちなりに想像してそれをなんとかしてでも代表せんとする先鋭的な小さなグループのラディカルさではダメだということだ。」170「イグレシアスの背後には15Mがあったが、ブザンスノの背後には実質的に何もなかった。当時のフランスには確かに多くの人々の動員があった。しかしまさに彼らは動いていただけで立ち止まることなく、議論しプログラムを考案するための空間を産み出すには至らなかった。反対に15Mはまさにそうした空間を産み出したのである。」住居接收を阻止する運動、学費値上げに抗う運動、「テレビの討論番組のなかでイグレシアスは街頭でのそうした運動の代弁者として語った。」170
- ② ポデモス創設を呼びかけるマニフェスト「駒を進めよう」
ポデモスの「サークル」：「数週間のうちにスペイン国内に1200ものサークルが出現し、そのうちのいくつかは100人規模の大きなものだった。」国外にも作られた。「サークルは15Mを受け継ぐものであり、そうであると同時に新たな次元、すなわち政治的代表的次元をも併せ持つものでもあった。」173
- ③ 組織内ダイナミズムと中央集権化
「ポデモスは創設当初から一種の矛盾を抱えていた」「党の創設を呼びかけ、党の指導を担う

ことになった人々とスペイン国内外に無数に作られたサークルとの間には最初からある種のコンフリクトがあった。」「2014年5月の欧州議会選挙のころまではこのコンフリクトはある意味でポジティブに機能していた」「選挙へと向かう党内過程は十分に民主的に進められた」「プログラムについての自由な討議があったし、候補者リスト作成の際にも党员であれば誰もが立候補できる党内予備選挙が行われた。」173 2014年11月支持率調査で30%に達した。「この頃から党指導部は国政に切り込んでいくために組織をコントロールしなければならないと言いつつ。9月15日から2ヶ月かけて党の組織構造を決定し役員を選出する過程が進められることになる。」10月18日・19日の全国大会で組織案をめぐっての討議が行われた。その後一週間の投票期間を経て「イグレスィアスから創設メンバーを中心としたグループによって作成された提案文書が約80%の得票率で採択。次いで、役員候補リストの募集が行われ、11月8日・9日にインターネット上の「ポデモス広場」で立候補者たちの公開討論会が実施され、その後投票が行われた。」176「採択された組織案はたいへん中央集権的なもので、指導部のリーダーシップを重視するものだった。」「イグレスィアスたちは役員選挙がリストを争うものでかつ多数決でなされるということを一方向的に決定した上で、さらに、規則上はリストはオープンでなければならないとしながらも、実際には彼ら自身、グループの部外者が後から入り込む余地をいっさい残さないリストを提出した。希望者が個人で立候補することのできた欧州議会予備選挙のときのそれとはまるきり異なる選出方法となってしまったわけだ。その結果、イグレスィアスたちは、党内民主主義を監視し保証するために設けられた役職に至るまで、すべての役職を仲間内だけで占有することになった。極めて乱暴なやり方で党内の権力奪取が図られたのであり、一種のクーデタが起こされたと言っている。」176-177「ポデモスにおいても規則上は「参加の道」なるものが定められている。しかしこれは実際には機能しない。何らかの提案を行うには党员の10%の賛同が必要になるが、ポデモスの党员になるのは簡単なことで、スペイン国籍の身分証明書と電話番号さえあれば誰でもすぐにインターネット上で登録でき、実際党员数は32万にも達しており、これを母数として10%の賛同を得ることは事実上不可能であろう。実際に活動している党员は多く見積もっても約一万だが、彼ら全員から賛同を得ても必要な割合には達しない。したがって「参加の道」は事実上閉ざされているのだ。」180「国政選挙についてもポデモス内での予備選はすでに行われたが、ここでもまたリストを多数決で選出するという方法がとられた。」「プログラム作成も党の活動家たちではなく、指導部が「最良の人々」と呼んでいる者たち、要するに専門家に任せることがすでに決定された。党はポリス化され、党の活動家たちは子ども扱いされ、そのいっさいの参加が封じられている。」181「このクーデタの結果生じたのは、イグレスィアスたちによる党の一極支配であり、サークルの完全なる権力喪失である。サークルが機能しなくなることで、同時にまたマスメディアを介する以外の方法での社会への影響力行使も実質的に失われてしまった。それどころか、マスメディアにおいてすら、選挙マシンと化したポデモスは次第にスローガンを繰り返すばかりとなり、そのせいでマスメディアはポデモスを避けるようになってしまった。」177「こうしてポデモスは、一方で党内民主主義を完全に失い、他方で党外に対しては空虚で退屈な言葉しか発することができなくなってしまった。」支持率の低下 2015年8月で13%。

④ 汚職・腐敗批判：構造批判ではなく、敵味方図式のもとでの敵批判

「ポデモスはラクラウのいう「敵対的フロンティア」という戦略を取っている。つまり「や

つら」と「我々」とをはっきりと区別するということだ。こうした区別は 15M にはそれほど強くは見られなかったものである。「99%」と「1%」とという言い方は確かにあったが、15M の表皮はもっと包摂的なものだったと思う。これに対しポデモスは「やつら」と「我々」の区別をつねに明確に維持しながら、たとえば、やつらの旧態依然とした政治か我々の斬新的な政治かといった二者択一を社会に迫る。ポデモスが行っていたそうした「線引き」のうちでもとくに強調されていたもののひとつが「汚職」「腐敗」をめぐるものであった。やつらは腐敗しているが、我々は腐敗していない。しかしこれは現実を過度に単純化したものと言わざるを得ない。ぼくたちはみな多かれ少なかれ腐敗しているのだから。」これにたいし、マスコミはあなた方も例外ではない、と攻撃し、太刀打ちできなかった。235-236「ポデモスは議論の立て方を間違えた。汚職や腐敗の問題は人格の問題ではなく構造の問題である。権力やカネへのアクセスの問題、権力によるカネの配分の問題であって、善人か悪人かといった問題ではない」のに、ポデモスは後者の問題としてたてた。

8) 誰も排除しない招待の空間：匿名性の政治、運動構造の変化

- ① 「15M はランシエールのいう意味での「誰でも」が参加できる一つの主体化空間を開いた。「誰でも」とは、富者でも貧者でも、労働者でも失業者でも、キリスト教徒でも無神論者でもといった意味である。15M の主体化プロセスはすべての差異を横断する形でひとつの包摂空間を開いたのであり、その空間には、状況を「耐え難いもの」「不当なもの」と感じている者なら誰でも参加できた。重要なのは、これが左右の区別も超えるものだったという点である。もし 15M が左翼だけに呼び掛けるものだったならば、はっきりと輪郭の定まった非常にコンパクトな運動、左翼的な参照体系、プログラム、言葉づかいといった枠組みのなかに小さく収まった運動になっていたに違いない。15M はそうした左翼的アイデンティティと決別することによってこそ、誰もが自分もそこへの参加を招待されていると感ずることのできるような包摂的な主体化プロセスを開いたのである。「プエルタ・デル・ソルは実際、誰のことも排除しない「招待の空間」のこの上なく物質的な実現になっていた。」
- ② 「問題は、ポデモスがこの「招待」という操作を選挙の世界にも応用しようとしているという点にある。誰であつてもソル占拠に参加できるということが、誰であつてもポデモスに投票できるということに転じられる。誰であつてもポデモスに投票できる、なぜならポデモスが擁護するのは「民衆」「人民」あるいは「コモン・センス」なのだからというわけだ。別様に言えば、ポデモスは右翼でも左翼でもないということである。しかし実際にはポデモスの中核メンバーは一人残らず極左の出身であり、そのことは誰の目にも明らかだ。彼らの話し方、振る舞い方、存在の仕方といったことを見れば、彼らが極左出身であることは誰にでもわかる。15M にはあつた正直さがポデモスにはないのだ。15M では「我々は左翼でも右翼でもない」と言われ、実際、党派的アイデンティティによる分離の彼方で様々な具体的な問題の共有だけが試みられた。ポデモスにはこの正直さが欠けており、彼らが 15M と同じことをするにしてもそれはもはや「戦略」でしかない。そして、彼らにとってすべてが戦略上のものでしかないというその事実が今日では多くの人が気づいてしまっている。マーケティングでしかなく、何かを売りつけようとする際の戦略でしかないと。」 237
- ③ 「15M は前もってはまったく予想し得ない出来事だったのと同時に、僕たちに左翼であることをついにやめさせてくれた出来事でもあつた。」「現実を断ち切り新たな地平を一気に構成

するような類の運動」「15Mは、それに先立つ闘争サイクルに身をおく限り「ラディカルな運動」とは見なしえないものであった。グローバル運動や「不服従」（白いつなぎ運動）あるいは世界社会フォーラムといった運動は、左翼あるいは極左の運動とそれとは異なる新たな運動との両面を併せ持った最後のものだったといえる。2000年代前半までのこの闘争サイクルにおいては運動の構成形態もまた複合的なもので、一方ではネットワーク型の不定形な構成が始まっていたのと同時に、他方では従来の左翼的図式に基づく地平が残されてもいた。15Mはこの後者の地平に決定的にピリオドを打ったのである。」186「15Mによる切断が可能となったのは主観性の存在論的な突然変異が起きたためであって、運動に携わる人が別の人になったわけでは必ずしもない。「真の民主主義、今ここに」の中心メンバーには実際、「ユーロメーデー」など、先の闘争サイクルのそのとりわけ末期においてすでに活動していた若者たちが多く含まれている。ただし、彼らはそこですでに、戦略/戦術の関係という観点から言っても、政治活動のあり方という観点から言っても、左翼のそれとは異なる新たな形態あるいは構造に身を置いていた。そこではアウトノミア型の前衛、労働者の自律性といったものですら退けられるべきものとされた。そして15Mは実際、そうしたアウトノミア的発想にも決定的なピリオドを打った。コミュニズムの地平それ自体が、ネグリ派のようなものも含めて、過去のものになったとすら言えるかもしれない（この点については僕自身は必ずしも賛同していない）。要するに左翼か右翼か、革命か改良主義かといった二分法、政治領域のダイナミズムをこれまで生み出してきたいっさいの二分法がその終焉を告げられたということだ。」186-187

- ④ 「15M以前に移行はすでに始まっていた」「15Mは2003年のイラク戦争反対運動を出自とするひとつの流れの可視化だった。1980年代のスペインにおいて中心をなしていた運動はとも政治化されたものだった。スクワット運動、兵役拒否運動、学生運動、フェミニスト運動、エコロジー運動など多様な運動があり、そのいずれもが確固たる政治信条をもった人々によって行われていた。1990年代に入ると反グローバルイゼーション運動が出現するが、これは80年代に登場したすべての社会運動が合流して形成されたものである。この意味で、90年代の運動は80年代の運動の延長上にあつた。「飛躍」は、1999年シアトル、2000年プラハ、01年ジェノヴァといった反グローバルイゼーション運動と03年のイラク戦争反対運動とのあいだにあると僕は思っている。」「スペインの文脈においてこの「飛躍」を考える上でとりわけ重要なのは04年の列車爆破事件を巡って起きた運動である。列車爆破事件によって戦争は遠いイラクでの出来事であることをやめマドリードにまで達した。三つの爆弾が200名近い死者を出したこの事件によって、運動はまさに「誰でも」（ランシエールはこれを「来たばかりの人々」とも呼んでいる）が参加するものへと一気に転じたのである（カタストロフや死が何を活性化させるのかという重要な問いをたてることもできる）。04年3月11日の列車爆破事件の後、社会運動グループが集まって「何が起きたのか」そして「何をなすべきか」を話し合うという会議がマドリードで開かれた。…会議は本当に酷いものだった。当時の僕たちが民衆に対して抱いていた不信感は並々ならぬもので、01年9月11日の後に米国で起きたのと同じような社会ファシズム化がスペインでも起きるだろうというのがその会議での僕たちの情勢分析だった。社会のそうしたファシズム化あるいは極右化のなかで犠牲となるのは自分たち左翼、反体制派の人間だろうと僕たちは社会に対して恐怖を抱いた。しかしその会議の二日後、社会運動によるいかなる介入もなしに、匿名的かつ自発的な呼びかけによ

ってスペイン全土から大勢の人々が PP 本部前に集まり、アスナール PP 政権による情報操作の試み（列車爆破事件を ETA による犯行に仕立て上げようとしていた）に対し異議申し立てがなされたのである。「これは僕自身も含む社会運動活動家には本当に衝撃的な出来事だった。ファシズム化すると僕たちの思っていた大衆が、それとは正反対に、斬新極まりない仕方で立ち上がり、最終的にはその後の総選挙の結果を揺るがすまでの力となったのである。」活動家として壁にぶつかった。「04 年以後、僕はもはやかつての友人たちと一緒に政治や運動を考えることができなくなってしまった」「強い政治性に立脚した運動から「誰でも」による運動への転換、……従来のいかなる社会運動にも還元しえない新たな運動の出現—こうしたことを考えるために僕には新たな友人が必要だった。」「04 年は活動家主体を主役としたものとは異なる新たな政治がととても強力な力たちで初めて出現した年であった。」 251-253

- ⑤ 「この「匿名の政治」は 06 年に居住権運動「住居の V サイン」（都市部の居住費の高騰などに対して、居住権の尊厳を訴えてデモや集会を行った市民運動）として再び活性化する。2 年間続いたこの運動には従来の活動家も参加していたが、しかしそれはむしろ活動家と「来たばかりの人々」とのあいだの境界を突き崩すものとしてあった。」09 年インターネットでのダウンロードを規制する政府法案に反対する運動も匿名性の政治化とみなしうる。その 2 年後に 15M がある。「それまで活動家たちが重視してこなかった「匿名の政治」のこの流れ、来るべき政治化の形態だとはほとんど誰も思っていなかったこの流れが 15M によって突如として圧倒的な仕方で可視化され多くの人を驚かせることになったのである。」「8 年前から実のところ存在していた」「身体的な知や感受性の形成、身体的な待機の高まりといった観点からよりよく理解することができる」 254
- ⑥ 「15M によって創設された「リビドー表皮」は変身を重ねながら 4 年の間生き続けてきたが、それが「劇場的厚み」に転じられた時点で「誰でも政治」としての 15M はやはり終わってしまったと言わざるを得ない。人々はまた政治の専門家たちの振る舞いを客席から見守るようになってしまい、人々にとっての「政治」はイグレスィアスやエレホンの演じるスペクタクルについて語ることへと逆戻りしてしまった。「誰でも」のものとなったはずの政治は今日再び私物化されてしまった。」 255
- ⑦ 構築されるべきは「マルチ能力によるマルチレベルでの政治」である。「政治家を支え、政治家に政権を取ってもらい、新たな法律を作ってもらおうという単線的な道ではなく、多岐にわたる能力が多岐にわたる場所において多岐にわたるレベルで展開されるという文脈の中に選挙政治的要素もその一部として位置付けるということ」「これは選挙政治を拒否するものではないけれど、しかし「劇場」ではない。運動と制度とを対置しそのどちらかを選ぶのではなく、政治をその複雑性あるいは不均質性において捉え、多岐にわたるアクターたちのそれぞれの平面の接続を考えるということ。」 256

9) 代表制の問いとポデモスのラクラウ主義

① 代表制の空白と 15M の限界

「15M が可能となったのは、当時のスペインにおいて左翼全体が機能不全に陥り完全な空白状態が作り出されていたからである。サバテロは辞任し、統一左翼はすでに「生ける屍」で、労組もさしたる動きを見せず、運動においても「ユーロメーデー」などの流れは完全に途絶えてしまっていた。空白、沈黙、暗闇そのものだったのである。」 194 「社会あるいは市民政

治に生じたこの空白は 15M によって「埋められた」わけではない。というのも問題となっていた空白は戦略のそれ、代表性のそれであり、15M はまさに代表性を拒否する運動だったからだ。」「15M のネットワーク型運動、オートポイエーシス（自己創出）的運動が恒常的な限界を抱えていたことは疑い得ない。全てが可能だったわけではなかった。たとえば「真の民主主義、今ここに」では、その組織化をさらに先に進めなければならないという段になった途端、代表性のファンタズム（幻想・幽霊）が直ちに回帰し喧嘩が始まってしまった。ネットワーク型運動には、絶対的とまでは言わないまでも、明らかに限界がある。」「国会包囲アクションも「空白」を埋めるものとはならなかった。一切の暴力なしに、ネットワーク型の運動によって、議員たちに「最悪な事態を回避するためには我々が辞職し憲法制定議会選挙を行うしかない」と覚悟を決めさせるということが試みられたわけだが、群集による非暴力クーデタともいえるそのような試みはやはり成功しなかった。15M は空白を埋めたのではなく、むしろ空白を誰の目にも見えるように顕現化させたのだ。」「人々が政治システムや政権の正統性を疑い、議会に解散を迫るのはいわば自然のことだった。それでもなおあの国会包囲が成功しなかった理由として、マルチチュードの自己規律化が欠けていたということも挙げられるように思う。バディウ派にとっては「規律」とはポル＝ポト流のそのことだろうが、しかし、「自己規律化」というものを「開かれたシステムの自己制御」といった意味で語ることもできるはずである。開かれたシステムがそのアクター間の模倣を通じて自己を制御する。15M に見られた知性には「警官隊と衝突してしまったら過激派として扱われ直ちに弾圧されることになってしまう」といったもののほかに「女性への生成」「ケアへの生成」という重要なロジックもあった。高齢者や障害者、移民や不法滞在者といった人々のケアにあたるということである。国会包囲では「ケア」のこのロジックがその実効性を十分に発揮せず、運動を革命へと転換させようと機会をうかがっていた極左グループの振る舞いを押しとどめるまでには至らなかった。現場では実際、最初は全てが上手くいっていたにもかかわらず、突如として極左グループの旗を持った人物が警官隊に突入していくということが起きた。…これが警官隊の反撃を許し、アクション全体が解体されるひとつのきっかけとなったのは疑い得ない。」196-197

- ② 「15M によって顕現化された「空白」にチャンスを見出したのがポデモスの創設者たちだったと言える。政治化した民衆のネットワーク的「現前」のダイナミクスと、そのインパクトの下で増幅されつつあった「代表性」のダイナミクスとのあいだをつなぐ政治主体に自分たちがなるというチャンスを彼らは見出した。」ポデモスの「アプローチは、マスメディアを今日の政治的代表性の鍵に位置づけるというもので、具体的には民衆をトーク番組に結びつけることで政治家たちが失ったものをマスメディアにおいて回復するというものだ。しかし、それはまた全てを解体してしまうこと、全てを茶番の次元に位置づけてしまうということでもあった。」「彼らが展開しようとしたのはメディアでのゲリラ戦とでも言うべきものであり、彼らはその作戦を通じてマルチチュードを従来の代表性メカニズムから切り離そうと試みたわけだが、この試みが上手くいかなかったのは、彼らが「政治神学」すなわちシュミット主義的主権論（代表するということは、不在を現前化すること、実際には存在していない（＝誰でもない）者を現前化することを意味するという主張。ルソーの一般意志を体現する代表制に通じる）に陥ってしまったからだ。彼らはその影響を隠さないムフやラクラウの議論は、マスメディアでのオピニオンリーダーが政治エリートになる時代における政治家階級の再正

統化のそれに他ならず、シュミット主義の社民版とでも呼べるものだ。」「結局のところひとつのスペクタクルを別のスペクタクルに置き換えただけだったのである。」 202

- ③ 「パブロ・イグレシアスは「我々の身を守るために我々に残されたものは国家しかない」と繰り返しているが、これは国家を道具と考えるスターリン主義あるいはシュミット主義の典型的な発想だ。彼らにとっては国家は決断主義を恒常的に維持するための道具に過ぎない。彼らは国家を内在的に捉えることを知らない。たとえばネグリの論じるようなスピノザ主義的発想、すなわちマルチチュードの搾取を組織するための形式としての国家、関係としての国家といった発想が彼らにはかけている。国家を「いまここで」捉えることができない。だからこそ彼らはまたマスメディアや学校、文化といった領域についても「国家装置」といった観点から思考せず、あくまでもヘゲモニーの観点から捉える（党の、あるいは決断する人の政治的ヘゲモニーを形成する手段？）。パブロ・イグレシアスが「国家」と呼んでいるのは議会や政府、軍隊といったものでしかなく、彼らにとってはそれを「奪取する」ことしか問題にならない。「まずは権力を奪取しその後でプログラムを実行する」という戦略をポデモスは掲げているが、これは馬鹿げているし間違っている。」「ポデモスもまた 15M の提起した「空白」の問題を解決するものにまるでなっていない」 202-203
- ④ 「ポデモスの創設者たちは政治領域を自律的なものだと考え、前衛主義や改良主義といった従来のパラダイムに代わるものとして、新たなメディア状況に対応したシニフィアンのポピュリズムを推し進めようとしている。」「そしてこの「シニフィアンのポピュリズム」に政治神学原理主義の内的再生産が組み合わされる。指導者が常に正しく、議論は不必要だとされ、さらに党内ではこの体制への信任が一般党员たちに強要される。」 205 「党内民主主義も含めすべてを選挙マシンに従属させなければならない」（2014年6月「6月報告」） 206 この報告は80%の賛同をもって採択された。「ポデモスの創設者たちは「権力を民衆に返す」というキャッチフレーズを掲げて人々をおびき寄せた上で、しかしそもそも「権力を民衆に返す」ためにはまず選挙に勝たねばならず、そのためには一つのヘゲモンを確立する必要があるとして、2014年10月の党大会においてこれへの同意を人々に求めたのである。」 206
- ⑤ 「今日のスペインにみられるのは「大衆」の存在である。」「アスナールを追い出すことで出現したこの「大衆」（表皮、構成的権力）は現在、政治的な突破口を探している。」「しかし、ポデモス、少なくとも今日の形態におけるポデモスはもはやそれに適うものではない。従来の「政党」のたんなる反復になってしまっているからだ。」「政治的代表的次元において人々は能動的に参加することを望んでいた」「何らかの指導者の下での受動性にはもう戻りたくないと考えていた」「ところがポデモスの指導部はあくまで人々を受動性において捉えようとした。あたかもテレビがなければ動員に期待することはできず、組織化がなければ 15M に期待することもできないかのように。」 179
- ⑥ 2014年10月の全国大会で「ポデモスはあくまでも国政選挙（15年12月実施）にのみ今後の力を集中させ、自治体選挙では候補者を立てないという方針が採択された。15年5月に行われた自治体選挙でポデモスは実際、党としては候補者を立てず、その代わりに党の活動家たちが他の人々と民衆連合を結成して選挙戦に参加し、これがいわば 15M の第二波をなすような動きとなった。」アオラ・マドリードやバルサロナ・アン・クムーといった候補者リストに参加、市長を出す。178-179 「アオラ・エン・コム」：2015年5月のスペイン地方選挙の後に登場した市民プラットフォーム。「たんなる政党レベルでの連立などではまるでなく、

多種多様なアクターを含むものであり、政党という枠組みを積極的に退けたかたちでの民主連合」183

- ⑦ 「(2015年5月24日の地方自治体選挙) 24Mが実証したのは、15Mによって開かれた環境が存続している状況においては、ラディカルな民主主義を広範かつ強力に拡大させるということが選挙に勝つために必要不可欠だということであり、それがまた権力の変革可能性の保証にもなるということだ。バルセロナやマドリード、サラゴサなどの市民プラットフォームにおいて見られたのは、一般的知性が外部からのいかなる命令も受けることなしに一つの政治的協働へ自ら導くというプロセスだったのであり、こうしたプロセスを産み出せるかどうかは15M以後のスペインにおいて選挙で勝利できるかどうかの鍵なのだ。」211「アオラ・マドリードやバルサロナ・アン・クムーなどの勝利を踏まえ、15Mとの連続性の中でポデモスを多声的組織化へと開かなければならない」⇒市民連合プロジェクトの誕生。212
- ⑧ 「ポデモス指導部がはっきり認識すべきなのは、15Mを通じて民衆が政治的自己組織化を獲得したということであり、また民衆のこの新たな政治的能力が「新興政党」といったものに容易に回収されうるようなものではないということである。」212
- ⑨ 「選挙での勝利は、スピノザに倣って言えば、力能の増大の一つである。重要なのは、力能と権力とは違うという点、力能が増大するとは対抗権力が増大するという点であって、選挙での勝利は権力の奪取ではないという点である。したがって、なすべきことはいたるところで対抗権力の増大を図ること、国政や地方自治体のレベルでもそうすると同時に、まさにPAHに見られるようなしかたで、運動のレベルでも対抗権力の増大を図られなければならない。」215「選挙に勝てばすべてが可能になるというのは幻想で、一般的に言っても「全てが可能になる」ということなどありえない。しかし、15Mが表現して見せたような共的な身体を動的編成に置く事で可能になることはたくさんある。」216
- ⑩ 「「権力とは実現の能力の増大であり、また政治的関係性の内外での行動の展望である。とはいえ唯一無比の「権力」や「政治」を特権化して語れるわけではない。ただ無数の異なる度合いの対抗権力があるのだ。なのにポデモスの指導者はほとんど全員が、組織の内外で同じ標語を繰り返している。「まず権力奪取、次に綱領の実現」と。」224「「政治の自律」は、もしも国家権力の制度や効果を過剰評価し、他方で政治の基礎である物質的生成とその合法性（法則性）を無視するならば、有害な理論となりかねない。代表する側と代表される側を分断する代表性。あるいは代表する側の不可思議で不可欠な基盤を作る「一般意志」（名を「人民」とか「人民連合」と称する）。こんなものは運動に関わることがらではない。肝心なのは政治的運動の流れを（再）創造することである。下からの開かれたガバナンス体制を作り直すこと。構成的議論を絶やさず、さらにはそれを市民に続々と広げていくことで、運動と政府が互いにつながったままの状態を保つことである。」224
- ⑪ はっきりしているのはヨーロッパの重要性がかつてないほど増しているという事実だ。ヨーロッパには今日、確かな「力」が存在している。「ナショナリズムの幻想とは訣別しなければならない。ヨーロッパ規模で政治主体を構築する必要がある。」「正面对決ではなく、包囲という仕方での力の展開を考えるべき」「戦略はヨーロッパ規模で構想されるべき」「民主主義はこんにち、完全に金融資本によって篡奪されてしまっている。ネイションをひとつの権力として打ち立てるといった「近道」ではどこにも到達できない。」215

重要なことは、主体の力能を高めること、対抗権力を増大させること。しかも、非ヒエラルキー的な形、非中央主権的な形で。それは、単に理念的な問題ではなく、主体がそれらを拒絶するから。ここに、「水平的」な形にこだわるグレーバーの限界がある。既存のブルジョワ政治に参加することは、必然的に垂直的な関係に巻き込まれるから避けるべきだ、と。「水平的」形による選挙への参加、市民プラットフォームの形成による、民衆の政治的自己組織化、力能の増大こそが重要。

2. 切り開いた地平：以下『叛逆 マルチチュードの民主主義宣言』より

1) 金融資本のヘゲモニーの下で生み出される諸問題を調停する手段は何か。

「現在支配的な政策制作枠組みと同じく支配権力も、危機に取り組むための構成的な改革を提起できずにいる。これまでの構成的な改革の近代史では、さまざまな調停手段が打ち立てられてきた。すなわち、自由主義的な政体の場合には重商主義的な交換関係を重視する媒介、厚生主義的（福祉国家主義的）な政体の場合には資本と労働の弁証法を重視する調停手段、といった形で。けれども、現代の経済の核心として存続している金融化のプロセスを重視する調停手段がいかなるものなのか、またそれをいかにして構築することができるかを思い描くのは困難だ。

今日、グローバル金融市場は、合法性と政治を自律的な仕方では生産するうえで抜きん出た地位を占めている。この事実を認識しない限り、国家主権はもちろんのこと、代表制や民主主義といったカテゴリーを再定義することは不可能なのである。金融の下す決定は、以前にもまして国民国家の行使する制度的な媒介手段を跳び越える形で一種の恐喝を行うものとなっており、そのせいで雇用と給与ばかりではなく、基本的諸権利（住居から健康までを含む）の享受さえもが金融市場の動揺と揺らぎに否応なく左右されるものとなってしまっているのだ。」

2) 構成的闘争：〈共〉の領域上で提示された、切迫した必要性を表すばかりではなく、新たな構成的プロセスのための道筋が書き込まれた地図を作成するような闘争。2011年以降の闘争はこうした構成的闘争としてあり、新たな原理を提示してきた。

3) 政治的構成に関する新たな原理：

「すべての人々は平等であること、また彼ら彼女らは政治的闘争を通じて一定の不可譲の権利を獲得しているということ、そしてそれらの権利には生命・自由・幸福の追求のみならず、〈共〉への自由なアクセス、富の分配における平等、〈共〉の持続可能性も含まれているということ」

「それらの権利を保証するために民主的協治（ガバナンス）が設立されねばならず、その正当な権力は被統治者の参加と統治組織の透明性に由来するものに他ならない」

4) 自律的な時間

開かれた水平的な集会における意思決定：きわめて時間のかかる緩慢なプロセスを要している。新たな原理は緩慢さや迅速さではなく、「自己の時間を管理運営する政治的な自律性」にある。「これは、21世紀最初に繰り広げられたオルター・グローバリゼーション運動が、サミットの会合のスケジュールに従う形で刻んでいた、厳格で人を消耗させるリズムとは非常に大きく異なる。「あらゆる瞬間において時間は、外からの圧力や選挙の時期が課すスケジュールから引き離され、それ

自身のカレンダーと展開のリズムを確立することになる」「オルタナティブとは、権力のプログラムと単に対立するだけの行動・提案・言説のことではない。むしろそれは、権力のプログラムとは根底的に非対称をなす立脚点にもとづく、新しい装置のことなのである。」その意味で、自律的な時間性という概念は、それらの運動がオルタナティブを提示するものであることを示している。「その立脚点は権力のプログラムと同じ空間を共有しているときですら、それとは別の場所にある。そしてその立脚点が有する自律性を通じて、諸々の主体性・闘争・構成的原理の生産が首尾一貫したものとなるばかりではなく、その時間性も整然としたリズムを刻むようになるのである。」「構成的な運動の有する緩慢な時間性によって、知識や専門的スキルを（コントロールすることに加えて）普及させ表明させることが可能になり、またそれらの普及と表明が強く求められるようになる。」「泊り込んで抗議を続けている人々は、交渉を重ねて知識と意志を複合的に構築することを通じて構成的な仕方で決定を形作るのだが、それには時間がかかる。単独の指導者や中央委員会が決定を下すわけでは決してない。」「オルタナティブな時間性は…政治的情動の教育を育成するものでもある。」「情動の生産とトレーニングがそこでは行われている。」「実際に泊り込んで時を過ごしたことの無い人々にとって、それらの構成的な経験がどれほどまで情動の流れと大いなる喜びによって活気づけられ、満たされたものであったかを理解するのは、困難なことであるに違いない。」「互いの身体が近接していたために情動の<共>的な育成が容易になったという面はあるけれども、さらに本質的な事柄としてあげられるのは、協働がもたらす強烈な経験や、警察などの攻撃にさらされやすい極端な状況で互いに身の安全を確保し合うこと、そして集団的な討議と意思決定のプロセスである。泊り込み抗議運動は、社会的かつ民主的な情動を生産する、大いなる工場なのだ。」

5) コミュニケーション

近代的工場において「労働者らが「価値創造的な情報」を生み出すのに対し、経営側の官僚制は労働者を管理するための情報を生み出している」「生きた情報は労働者によってたえず生産される情報で、これが死んだ情報に転換され、機械組織と全官僚機構のなかで固定化・結晶化される。」「工場には少なくとも二つのコミュニケーション回路がある。管理と機械に属する死んだ言語は、規律の機能と従属をめぐるさまざまな関係を体系化し、強化する。他方、労働者同士の生きた情報の交換は、集団的な行動や不服従に結集することが可能だ。」「メディアにつなぎとめられたものは死んだ情報で満たされており、生きた情報を創出する私たちの力を阻害している」

「マルクスが論じるところによれば（「ブリュメール 18 日」）、農民たちは田舎に散在して暮らしており、互いに効果的なコミュニケーションを交わす能力を欠いているがゆえに、集団的な政治的行動をとることができない。農民たちは自らを代表することができないのだ。ここでマルクスが田舎の農民生活を測る基準は、都会のプロレタリアートのそれである。つまり、コミュニケーションを交わすことによって政治的に行動することができ、自分自身を階級として代表することができるというものだ。」「プロレタリアたちにはあつて農民にはない、最も重要なコミュニケーションは、プロレタリアたちが工場の中で物理的、身体的に協力し合って、ともに働いているということである。階級と政治的行動の基盤は、主に情報の流通を介して形成されるわけでもなければ、観念を介して形成されるわけですらない。むしろ政治的情動の構築を介して形成されるのであり、この政治的情動の構築に必要なのは、身体的な近接性にほかならないのだ。」

「占拠に参加した人々は、そこに一緒に存在することを通して新たな政治的情動を創出する力能を経験した。」

「ネットワークを形成し、その中で能動的にコミュニケーションを交わすことができるようになるためには、まず特異性に生成変化しなければならない。あなたが特異性に生成変化するときには、決して全体的（＝統一的）自己であることはできないだろう。諸々の特異性は、内的にはそれぞれが多数多様であることによって、外的には他の特異性との関係において自らを見出すことによって定義される。それゆえ、ネットワークを形成した諸々の特異性が交わすコミュニケーションと表現は、個々人によるものではなく、合唱的なものであり、つねに行為と結びついた活発な状態で、私たちを他者たちとともにある存在へと作り上げていく。」

「私たちは諸々の特異性としてネットワークのなかで自由な可動性を手にしている。私たちは昆虫のように群がり、新しい道を歩み、新しい様式や配置のなかで寄り集まる。ここで中心的な役割を担うのが、政治的組織化の形態である。つまりその形態とは、諸々の特異性からなる脱中心化されたマルチチュードが、水平的にコミュニケーションを交わす、というものである（またソーシャル・メディアは、そうした組織化の形態と合致したものなので、マルチチュードにとって有用な働きをする）。今日、デモと政治的行動は、指令を発する中央委員会から生まれるのではなく、数多くの小さなグループが集い、そこで交わされた議論から生まれている。同様に、デモの後、数々のメッセージが近隣のつながりを通じて、また大都市に張り巡らされた多様な回路を通じてウイルスのように広がっているのである。」

「ネットワークを形成する諸々の特異性間の真のコミュニケーションは、（身体的に近接した）泊り込みの抗議が必須となる。泊り込みの抗議は、…一種の自己学習の経験や知の生産をもたらすのである。そうした瞬間は魅惑的で啓発的なものを感じられるだろう。というのも、集合的知性や新たなコミュニケーションが、ともに存在することを介して構築されるからである。」「2011年に占拠された広場では、さまざまな集会における議論、衝突、合意を通じて新たな真理が産み出された」「居住権の問題や抵当権の行使、ジェンダー関係、暴力に至るまで、さまざまな問題を議論するワーキンググループや委員会が立ち上がり、これらが自己学習の経験としても知の生産を広める手段としても機能していたのである。このような泊り込み抗議を経験したことのある人なら誰でも、新しい知と新しい政治的情動が、ともに存在する人々の相互作用から生じる身体的・知的な強度の中で、いかにして創出されるのかを覚えているだろう。」

自由なソーシャルネットワークは「スペインの泊り込み抗議運動を組織する際に用いられた主要なツールであった。」このことは、他の諸国での闘争においても同様であった。「一方での闘争の構築と循環＝流通、他方での構成的権力の表明、これら両方を常に保持しなければならない。こうしてこう攪乱的（＝転覆的）な闘争においては、闘争の即時的（＝直接的）な主題と手段が混ざり合うのだ。このようにして＜共＞の構成的権力は、新しいメディア（セルラーテクノロジーやツイッター、フェイスブック、またより一般的にはインターネット）を、マルチチュードによる民主的な協治（ガバナンス）の実験のための媒体として取り入れながら、構成的権力のさまざまなテーマと分かちがたく結びつくことになる。」「認知資本主義の社会においては、資本主義による管理とそれに対抗する生きた労働の抵抗の両面で、知識が社会的諸関係の核心をこれまで以上に構成するものとなる。してみれば、現在の闘争のサイクルを推進している活動家の大部分が、学生・知的労働者・都市部のサービス職に従事する労働者－認知的プレカリアートと呼ばれることもある人々であることは偶然の一致ではないだろう。彼ら彼女らは、コミュニケーション活動、知的労働、そして学習のために必要な努力を自ら体現し、それらを互いに媒介しているのである。」「そうした闘争の増殖と、それらが有するパフォーマンス的な特徴は、労働力の新たな性質をその基礎としているの

である。認知労働が中心的ヘゲモニーを持つようになるにつれて、認知労働はそれらの闘争形態に浸透し、そこで具体化される。またそれに伴い、運動が抗議活動から構成的プロセスへと移行していく中で、権力の公共性と透明性が中心的な重要性を帯びることになる。「認知労働者が持つ、知識に対する好奇心や活力、欲望を規律化したり抑制したりしようとするいかなる努力も、彼ら彼女らの生産性を縮減してしまうことにつながる。認知労働者のそうした特性は今日の経済的生産にとって不可欠のものなのだ。」「だが、同時にそうした特性によって、権力の行使と代表制の正統性に関する新たな矛盾が明らかになる。人が知識を求める好奇心や活力、欲望を持つならば、権力の不透明性と秘密主義が破壊されることを要求するだろう。」「あらゆる権力の超越性が破壊されなければならないのと同じように、あらゆる知識の超越性も破壊されなければならないのである。」「何世紀にもわたって指導者たちは、民主主義と国家理性は手を携えて進むと言い張ってきた。現在ではその代わりに、真の民主主義の到来は国家理性の完全な破壊を意味すると言わなければならない。ウィキリークスとそれを支える匿名のネットワークは、その非常に明確な一例である。」

6) 対抗権力

「(時間をかけた) 構成的プロセスは、社会と環境に関する差し迫った必要と危険が存在する領域では即座に行動を起こすような、一連の対抗権力を伴うものでなければならない。」環境問題と食・健康・住に関する人間の必需品へのアクセス、恒常的戦争状態を終結させるためにも対抗権力は不可欠。「対抗権力を構築するために生政治に必要なのは、国内法と国際法が提供する頼みの綱としての手段を超えて、自由に使用することのできる強制力を備えた武器に他ならない。民主的な対抗権力は、企業と国民国家に対して、<共>へのアクセスを開かれたものにするとともに、すべての人々が基本的ニーズを満たすことができる形で富を公平に分配するように強制できなければならない。そしてまた、社会システムと環境システムおよびこの惑星全体とそこに暮らす人々に対してなされた破壊を停止し、損害を償うように強制できなければならない。」「どうすれば、そうした民主的な対抗権力を構築することができ、またそれらの対抗権力はどこでその力を手に入れることができるのだろうか?」「これらすべてのことは、今日、闘争に携わっている人々の主たる関心事である。」

7) 代表制の拒否

「20世紀の近代ブルジョア社会の市民には、搾取された人々や疎外された人々（規律化された労働者階級も含む）と同様に、国家と市民社会の（しばしばコーポラティズム的な）制度を通じた政治的行動への回路がまだわずかに残されていた。労働組合、政党、より一般的には市民社会の様々な連合組織に参加することによって、政治的生活のためのいくばくかの空間が開かれたのである。多くの人々はこうした時代に対して強いノスタルジーを抱いているが、往々にしてその愛着は偽善に満ちている。だが、…そうした市民社会はいかに急速に衰滅し、死滅していったことか。」

「代表されたものは代表制の構造が崩壊していることを認識してはいるが、それに代わる他のシステムを見出せないまま、恐怖へと押し戻されている。この恐怖から、代表制の見せかけすらないポピュリスト的ないしはカリスマ的な政治形態が出現している。市民社会とその広範な制度からなる基本構造が消滅したのは、一つには労働者階級、その諸組織、そして労働組合が有していた社会的なプレゼンスが衰退した結果である。それはまた変革の希望が見えなくなったため

もあつたし、現実には企業家の能力が自滅したためでもあつた。彼らの能力は、金融資本のヘゲモニーによって溶解し、また社会的結合のメカニズムとしてもつばらレントのみが価値を持つことによって溶解したのである。」「こうした社会で社会的流動性とは、とりわけかつてブルジョアと呼ばれた人々（そして次に中流階級と呼ばれ、今日ではしばしば危機の中でプロレタリアート層と区別がつかなくなっている人々）にとっては、闇の中への降下、底なしの穴の中への降下なのである。恐怖が支配しているのだ。こうしてこれらの階級を保護するカリスマ的な指導者が出現し、自分たちは同一のアイデンティティに帰属しているのだと彼らを納得させ（もはやそれは、統一を欠いた、ただの社会的グループ分けに過ぎないのだが）、ポピュリストによる組織が台頭することになる。」

「代表制は、それ自体が定義上、権力から人々を切り離すメカニズム、すなわち命令する人々から命令される人々を切り離すメカニズムにほかならない」「政治的・代表制は、人民を権力構造に結びつけるとともに、そこから切り離す機能を果たすという意味で「相対的な（＝不完全な）」民主政だと考えられていた」「ルソーにとって代表制とは、社会を構成する「全体意志（＝全員の意志）」から「一般意志」へと移行する、つまり全員によって事前に選ばれるが、誰にも応答責任を持たない者たちの意志へと移行する、（形而上学的な）移行経路を通じて生み出されるものなのだ」「カール・シュミットが指摘するように、代表するということは、不在を現前化すること、つまり実際には存在していない（＝誰でもない）者を現前化することを意味する。」

「今日、仮に私たちが代表制という近代の神話を信じ、それを民主主義の媒介手段として受け容れるとしても、代表制を可能にする政治的文脈は根本的に縮減されてしまった。代表制のシステムはそもそもナショナルなレベルで構築されたものなのでグローバルな権力構造の出現が代表制を劇的に掘り崩しているのだ。新しいグローバルな諸制度は、人々の意志を代表する振りをすることすらほとんどしない。政策協定や事業契約は、グローバル・ガバナンスの構造の内側で、つまり国民国家に属するあらゆる代表制の能力の外側で調印され、署名され、保証される。」「かつて代表制は（社会契約や一般意志という）ごまかしの手法で人民を権力に就かせるというふりをしていたが、こうしたグローバルな領域においてその機能がもはや何の効力も有していないことは確実である。」

「代表制と代議政治の諸構造は、21世紀初頭の新自由主義の危機のさなかに何百万の人々によって拒絶を宣言されてきた。こうした抗議と拒絶をとおして、この危機が経済的・社会的・政治的なものであるばかりか、構成的（＝立憲的）なものでもあるということが明らかになる。」「政治的かつ構成的な議論を再開しなければならない」

「今日求められているのは、内容に関する変化（私的なものと公的なものから共的なものへ、というように）だけではない。より根本的に、形態に関する変化も求められている」「どうすれば、人々は＜共＞のなかで緊密に連合し、民主的な意思決定に直接参加することができるのだろうか？ どうすれば、マルチチュードは民主主義を再発明し実現するような仕方で、＜共＞の諸制度の君主になることができるのだろうか？」

8) <公>から<共>へ

① <共>的財の管理運営

水・銀行・教育などの社会財を<共>として制度的に構成し、それらの財を構成的原理や不可譲の権利と合致した<共>の制度へと変容させることはどうすれば可能なのか？」「民主的な参

加を通じて、制度・財・資源を<共>として有効に管理運営することは可能か」

「いかにして<公>を<共>へと変容させるかという問いは、…三つの論点を提起することになる。第一の論点は、法を<共>的なものにするという、抽象的だが根本的な原理に関わるものである。この原理は、市民共同体が財を統制し、管理運営するのに必要な、<共>の法的プロセスを創出する役割を果たす。第二の論点は、財の<共>的な使用原理を組み込んだ管理運営システムの創出に関わるものである。第三の論点は、民主的な参加を、財の所有権と管理運営に関する政治的領域として規定するものである。このように<共>的財について語ることは、市民の直接的な参加を通じて管理運営される財の集合に関して、構成的プロセスを構築することを意味する。」

「ルソーは一般意志を「全体意志（＝全員の意志）」の上に立ち、またそれを超越した人民総体の意志であるとみなす。けれども、全ての市民がその管理運営に携わらなければならない、またそれについて民主的な決定を行わなければならない、<共>的財は、あくまでも共同体に内在したものであり、一般意志のように共同体を超越したものではないのである。」「革命家としてのルソーは、私有財産を犯罪として公然と非難しさえしたのだが、その一方で一般意志を権威の概念として首尾よく確立して見せた。ルソーはもっぱらこのことを、一般意志があらゆる人々の意志であるためには、それは全員の上に立ち、誰にも属さないような意志でなければならないと想像することによって成し遂げたのである。まさにそのために、ルソーの一般意志という概念は、国家主義的な解釈、さらには権威主義的な解釈さえも受け容れる余地があるわけである。」

「これとは対照的に、<共>的財は、すべての人々によって構築され、所有され、管理運営され、分配されなければならないものなのだ。<共>的なものになるとは、マルチチュードの理性・意志・欲望に導かれながら休むことなく活動することである。またそのさい、マルチチュード自身も、<共>的なものについての知識を身につけ、政治的情動について学ばなければならない。したがって、社会を構築し、構成的プロセスを生み出すために、市民は<帝国>の一般意志を想像して、自らそれに服属するように強いられているわけではない。そうではなくて市民は、全体意志をともに織り上げていくプロセスを通じて、自分たち自身で<共>創りだすことができるのである。」

② <共>を求める永続革命

「<共>のための闘争は、民営化（＝私有化）の脅威に直面したとき、しばしば公的な管理によって防御されるほうへとこっそり向かったり、それを公然と求めさえするようになる。私たちの目的はあくまでも<共>であるというのに、私的所有の権力に直面した場合、公的所有を求めて闘争する必要があるのだろうか？」二重の闘いが必要となる。「<共>の側に立ち、新自由主義に反対する多くの社会運動は、私有財産の支配を覆すために<公>の側に立って闘争するのだが、それと同時に、またはそれに続いて、<共>と自主的な管理運営のメカニズムのために公的権力に抗して闘うことになるのだ。」「公的管理を肯定するすべての戦略を退ける必要はないけれども、それらの戦略に満足することもできない」<公>に味方すると同時に反対する永続革命の必要。

③ 社会運動と政府の関係：党による媒介

社会運動と政府の関係は 20 世紀全体を通して「社会主義的慣行により、政権構造の内的な関係性として類型化されてきた。たとえば、労働組合と党の間のダイナミックな関係性は、党機

能の内部関係として捉えられたのであり、また党が政権について社会主義政府が成立すると、社会運動の活動性は、政府の支配構造が許す範囲内にとどまるものに改造されてしまうことになったのである。」「こうした内的な関係性は、組合から党、社会運動、政府までが同じイデオロギーに基づき、戦略・戦術を同じように受け止め、さらには同一の人々に指図されているという事実（ないしは思い込み）に由来するのである。社会主義政党が推し進めた「闘争の続行と政権の運営」というスローガンは、それら二つの「機能が両立可能であり、党の内部に属するものである」という考えを端的に示すものだ。」

「私たちがラテンアメリカ諸国で目にしてきたのは、決定的な外在性（＝外的関係性）、すなわちそうした（社会主義的な内的関係性の措定といった）組織化の慣行やイデオロギー的立場、政治的目標からの運動の分離なのである。ときに運動と政府が共闘して、国内の寡頭制や国際的な企業、人種差別的なエリート層に抗する闘いをともに進めることもあるが、そうした場合ですら両者の分離は維持されている。」「しかし、それと同時に運動は、政府に対して協働的ないしは敵対的な（あるいは協働的であると同時に敵対的な）関係性を保っており、そのおかげで運動は、経済的・社会的・行政的・構成的な特定の争点をめぐって、自律的に行動することができる」

「運動と政府の間のこうした外的な関係性を通じて、政府の行動のうち指導的な側面を著しく変容（および縮小）させる働きが始動することになる。」「政府＝統治（ガバメント）のメカニズムは協治（ガバナンス）のプロセスへと生成変化せざるを得なくなるのだ。それにともない、政治と行政をめぐるさまざまな意志は、多数多様で開かれた現場に関与するようになる。」

「同じくまた、統治（協治の誤訳か？）の機能によって主権権力が弱体化され、その結果むしろ統治の機能は、人々の合意に基づく介入を実現し、立法的規範を多元的に創出するための開かれた共同実験場となる。」「いかに多数多様な人々が出会い、また時には抗争がいかに多数多様なものであったとしても、統治のプロセスに含まれている深い政治的な一貫性が、それでもなお維持されている」

9) ポピュリズム批判

「ポピュリスト政府は、社会運動の多様な表現を何とかして主権権力の源に引き入れ、それと合体させようとしている。このように社会運動と主権権力を不明瞭なたちで合体させた混交的な政治体制には、扇動政治の危険性ははらまれている。たしかに、諸々の社会運動がポピュリスト政府の支配的な枠組みの中でそれぞれのアイデンティティを維持しているというのは、よくあるケースだ。しかし、そうした妥協的なケースにおいてすら、それらの運動は自分がより高度な統一性を打ち立てるための一部分にすぎないということを受け容れた上で、（ポピュリスト政府の）ヘゲモニー的権力によって包摂されなければならないのである。あらゆるポピュリスト政府にとって本質的に重要なものはヘゲモニーにはかならないのだ。」「けれども、社会運動が政府に対して外的な関係性を保ち、その自律性を守るとき、そうしたポピュリスト的ヘゲモニーの基盤は、政府に抵抗する行動によって、たいてい掘り崩されてしまうのである。」

「運動と政府の間の開かれた関係性や、多数多様な入口を備えた多元的なガバナンス形態、そして私たち自らが発明する生の諸形態のためのルールを不確定な（＝偶発性を排除しない）やり方で形成すること、これらいくつかの要素こそが、すべての人々の参加に基づく〈共〉の民主主義を着実に進めていく上で、その基盤となる地平を構成するものなのだ。」

10) マイノリティ（少数者）の保護と表明

「最近のさまざまな運動が私たちに示してくれたのは、諸々のマイノリティを保護することは多数決原理の撤回を必要としないし、マイノリティをマジョリティから切り離して個々のアイデンティティ集団の中に閉じ込めてしまうことを含意するわけでもない、ということである。」「そうではなくて、意思決定プロセスに参加する諸々の特異性が織りなす関係性は、様々な差異を包含し、表明するための仕組みを提供するのである。」「この間さまざまな運動は、パフォーマンスな実践を練り上げることでマジョリティの意志を表明してきた。」ジェネラル・アセンブリやスポークス・カウンスルで採られている意志表示の方法。マジョリティの感情のダイナミックな表現。「水平的で民主的な集会は、全員一致を期待したり、追求したりはしない。そうではなくて、それらの集会は、様々な抗争や矛盾に対して開かれた多元的なプロセスによって構成されるのである。マジョリティの下す決定は、それぞれのマイノリティの差異をふまえた包含のプロセスを通じて、もっと正確に言えば、諸々の差異の凝集を通じて前へ進むのである。言い換えるなら、集会の働きは、互いに異なる見解と欲望を結び付け、それらが偶発的な仕方で互いにフィットし合うような方法を見つけ出すことにある。」「それゆえマジョリティは、均質な単一集団にも、同意に基づく集団にもなることはなく、諸々の差異を連結したものになる。そしてまた諸々のマイノリティの保護は、分離することによってではなく、プロセスに参加する力を与えることによってなされる。マジョリティと諸々のマイノリティがこうした布置をとるようになるおかげで、代表者たちの見識に依拠した一般意志を置き去りにして、全体意思（＝全員の意志）に従い、民主的に政治を創り出すことが可能になるのだ。」

- ▶ イデオロギーではなく、解決されるべき課題を共有することが、こうした連結を可能にする。

11) 政治の多元的存在論と連邦主義

① 闘争の示しているもの

「都市の近隣地域での情動やニーズ、アイディアに関するシンプルかつローカルなコミュニケーションから発した」運動は、「連邦主義のモデルのなかに自らの支えや発想の源を見出していった。それにともない、小さな集団や共同体は、それぞれの差異を破棄するのではなく、むしろ表明することによって、互いに結び付き、<共>的なプロジェクトを創出するための道筋を見つけたのである。このように連邦主義は（様々な特異な差異の）合成を推進するモーターなのだ。また、この場合の連邦主義には、国家と連邦政府の主権に関する要素はすでにほとんど残されておらず、アソシエーション（＝ネットワーク的連合）という連邦主義的論理に裏打ちされた熱情と知性がミクロなレベルで存在しているのである。」

「政治は、さまざまな運動において多元的存在論を身につけつつある。異なった伝統から現れ出て、異なった目標を表明する諸々の運動が織りなす多元論は、協働的かつ連邦的な集会の論理と結び付き、構成的な民主主義のモデルを創り出している。しかも、そのモデルにおいては、それらの運動の間の差異が互いに結合し、作用しあいながら、さまざまの特異な差異を合成した組織体を形成し、またそれを共有しているのである。」「それらの運動を通していかに主体性が生み出されるのか」「議論し、学び、教え、学習と研究を進め、コミュニケーションを交わし、行動に参加すること—このようなアクティヴィズムの形態を通して、主体性生産の中軸

が構成されるのだ。」

「2011年の泊まり込み抗議運動や占拠された広場の中で開かれた集会は、こうした連邦主義的流儀で、さまざまな場所に力を伝播させた。各々の集会は、それ自身のルールに従って機能し、表現と意思決定のための独自の技法を発展させる。ある提案に賛成の意を表すために、手を上げてひらひらさせたり、ツイッターでフォローしたりするような、単純な手法が用いられるケースもあるが、すべての集会では、小さな指導者集団に権力を集中させてしまうような深く根付いた傾向を阻止しようとする意志が共有されており、またそうした傾向に代えて、全員が討議と意思決定に参加できるような仕組みが用意されているのである。」「何百人、ときには何千人にもものぼる参加者が力を合わせて作り上げるこれらの運動のなかで、集会という形態は、民主的な立法権力を創出するための道具として役立つのだ。」「それらの集会は、可能なる連邦主義について思考するための強力なモデルを提示している」

② 構成的プロセスにおける立法権力

「構成的プロセスにおける立法権力は、代表制の一機関であってはならない。それは社会生活と政治的意思決定の統治に全員が参加することを促進し、育成する機関でなければならないのだ。」「構成的権力に含まれている立法的側面は、社会運動と社会的諸力の多数多様性を反映するとともに具体的に表現し、それによって政治の多元的存在論を自己の解釈に基づいて実際に機能させなければならない」「このようにして連邦主義が、構成的な立法権力の根本原理となる。ここで私たちは連邦的という語によって、州や省といったより小さな政治的単位を支配する中央の権威のことを意味しているのではない。「中央集権化された抽象的な統一体のもとに包摂されることのない、社会的領域全体に広がった多様な政治的諸力のあいだの、開かれた、絶えず拡大し続ける関係性」というもっと基本的な意味で理解している。」「私たちの意図している連邦主義的組織体は、ピラミッドのかたちではなくて、水平に広がっていくかたちをしているのだ。そのような形状をとる連邦主義は、プロセス指向的かつ多元的な次元を政治の中に育成するのである。」

「連邦主義に含まれているこれらの「ポスト国家的」側面を、閉ざされることも中央集権化されることもない立法権力にとっての基盤にすることは可能だろうか?」「そうした試みが一定の形を取り始めるのは、私たちが立法権力を社会運動の時間性に従うものとして考え、さらにその連邦構造を社会運動の空間的次元—ある特定の地域に根差すと同時に広く行きわたってもいる次元—に適応したものとして考えるときである。」

③ 意志決定

「15M は一種の「受動性」を特徴とするものでもあったが、その受動性は政治を知覚するための開かれを作り出す受動性だった。」「15M が証明してみせたのはネットワーク型の相互作用によっても意思決定がなされうること、決定あるいは決断は必ずしもシュミットやレーニンが唱えるようなものではないということであった。」 187

「主体はつねに超個体的なもの、つねに複合的なものであり、つねに複数の人が決定に参加することになるが、それでも最終的には決定がなされる。」プエルタ・デル・ソル占拠を終わらせるかどうかについて、全会一致の規則などがあって、15日間何もきまらなかったが、終わりを決断しなければならないという意味が下からの発言によって徐々に共有されていった。「ネットワーク型の相互作用が決断にその土台を与えたということであり、この決断は状況についての決断ではなく、状況それ自身による決断、状況に内在する決断だった。主体性を欠いた決

断であるようにも見えるかもしれないが決してそうではなく、多様体としての主体性がその内的相互作用によって決断を産出したのである。ここでの主体性は、したがって状況からいったん身を離した上で外部から状況について何事かを決定するといったものではない。それは党のメタファーであり、将軍のメタファーである。」188-189

12) 「<共>の制度性」：支配的体制を骨抜きにする「脱構成的な力」、運動が政府とは別の場所にいること、政治的展開の緩慢な時間性と自律性、制度とコミュニケーションの透明性、「暗黙の対抗権力」（構成的プロセスそのものの内部に存在し、非常事態に備えて、危機の要因に抗して行使される用意がすでにできている権力）の表明、マイノリティの保護の増大、民主的な意思決定プロセス。

- 社会主義的な党による運動の統一は存在していない。そのような党を否定したとき、共産主義者（のグループ）の果たすべき役割は何か。その関係性、組織の形態はいかにあることが可能か。
- 主体の技術的構成のありようの変化に応じて生じる主体の闘争形態の変化に応じることが可能な組織形態をとるほかはない。党の中央集権制を必要としたのは、単に中央集権制をとる敵を打ち破るためだけではなく、むしろ産業労働者の垂直性・密集性に依拠した闘争に対応するためでもあった。ポストフォーディズムにおける非物質的労働のヘゲモニーの下で、主体の水平性・社会全体への分散性に基づいた組織形態が必要。敵に規定され、敵の相似形をとることはできない、かつ誤り。
共産主義者の自己組織化の形態：中央集権主義の拒否。諸グループの連邦主義的なつながり。行動の上からの統一の拒否、下からの諸闘争の内的欲求としての共同行動
- <共>の推進という路線を共有、資本主義・国民国家主権（それを支える官僚制と常備軍）への批判・解体を欲望として共有（<共>に反するから）
- 真理の独占者の拒否、下からの闘争の内部にあつて闘争参加者ととも新たな真理を創出する。

以上

参考文献：

- 『叛逆 マルチチュードの民主主義宣言』アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート NHK 出版
- 『デモクラシー・プロジェクト』デヴィッド・グレーバー 航思社
- 『資本の専制、奴隷の叛逆』廣瀬純 航思社